

No. 3125

韓日歴史をめぐるワークショップ
ー国際理解における歴史学の役割を考えるー

慶応義塾大学 名誉教授
慶應義塾福澤研究センター顧問
小室 正紀

国際的な相互理解において、歴史学はいかなる役割を果たすことができるのか。日韓両国の若手研究者による研究発表会と、共同で史料の閲覧や史跡見学のワークショップを行った。2020 年の開催を計画していたが、コロナ禍で実施時期や規模の変更を余儀なくされ、2023 年 8 月 21 日から 24 日、韓国ソウルおよびスウォン（水原）で開催した。

まず 8 月 21 日に梨花女子大学教員および大学院生と共に、学芸員による解説を受けながら国立民俗博物館を見学した。

翌 8 月 22 日には、梨花女子大学にて研究発表会を行い、梨花女子大学が準備した 3 本、李美京氏による「高麗と宋 医官選抜試験科目の比較」、盧炫縝氏による「20 世紀初頭バンカ島における「華工貿易」の抵抗」、朴圭里氏による「トム・ブラッドリーの LA 世界化政策と人間関係委員会」、慶應義塾福澤研究センターが準備した 2 本、姜兌琬氏による「1910 年代日本における外国人教員の受け入れ過程ー慶応大学・ハーバード大学間を中心にー」、中村陵氏による「アジア・太平洋戦争期における総力戦研究所の民心調査」の計 5 本の報告が行われ、活発な討論が交わされた。また日本から参加した大学院生や研究者は、各々取り組んでいる研究について紹介し、梨花歴史館を見学した。

8 月 23 日には水原に赴き、延世大学王賢鍾教授（韓国近代史）による水原の歴史に関する講義のあと、学芸員の解説を受けながら、華城行宮や華城博物館の見学を行った。

常に過去を意識する歴史学は、国際理解にとって両刃の剣となり、特に東アジアにおいては、各国間の歴史と真摯に向き合うほど、理解を拒むものも生じてしまう。しかし、若い研究者達が互いに、自身の研究対象に止まらない幅広い研究発表を聴き、議論すること、また他国の研究者と目の資料を通じて歴史の記憶を共有する行為は、相互理解を深めることになった。このような学術交流を通じ、歴史学は未来を構築する一助となり得ると思う。